



しつけの時機

波多野完治

「鉄はあついうちに打て」といいます。どんなものでも、それを仕上げるのに、時期があることをいつたものでしょう。

子どものしつけもその通りだとおもいます。時機をまちがえると、子どものしつけはうまくいきません。

お母さまたちのしつけのし方をみてみますと、二つの型があるようです。第一はておくれになつてからあわててしつけようと骨をおる人たちです。小学校の一年ぐらゐでやつておかなければならないことを、小学校の三年ぐらいになつてからはじめ、そのために親も子どもも大変な苦勞をしているのをみかけます。

もう一つは早すぎて失敗する型です。こういうのは子どもにかまひすぎ、子どもの教育に熱心になりすぎるところからおこるようにおもわれます。小学校へ上るまえに字をおしえてみたり、本をよませてみたり、又はあん

まりキチンとしたお行儀をしこんだりするのはこの例です。こうしますと、子どもは、その仕事に対してまだ本當の「欲」が出来ていないので、うまくいかないばかりか、出来もしないつらいことをやらされる、というので、かえつて一生その仕事や勉強がきらいになつてしまします。一生音楽がきらいだつたり、後はみるのもいやだつたりする子はたいていこうして生れます。こんな風に、しつけは早すぎても、おそすぎてもいけないのですが、このように年令によつてしつけの種類と段階があるばかりでなく、時機によつてもしつけのしやすいつときとしくいつときがあるようです。

幼稚園に上るころはしつけのきまりをつけるに大変よい時機です。幼稚園に上るときをはずすと、もう今度は小学校へ上るときまでしつけの出来ないようなこともあります。しかし又、幼稚園に上りはじめると、子どもは、なにしろはじめての社会生活なので気ずかれがし、神経質になつているときですから、一寸した言葉や叱責がひどく気になります。そのためにしつけが却つてうまくいかないということもあります。

これをさけるには、幼児の生活のしぶりをよくみて、のんびりとしつけが進むように、だんだんにするのがよいようです。

急激に無理にやる、というのは幼稚園に上るころの子どもには一番禁物のようです。